

ベニアズマを主力とする大規模土地利用型農業経営に取り組んで

旭村甘しょ研究会元会長（現農業者 兼 銚田市議） 井川 茂樹

＜ベニアズマ産地への歩み＞

茨城県旧鹿島郡の旭村、銚田町および大洋村が合併した銚田市の農地面積は9.2千ha、温暖で自然災害も少なく、水はけのよい関東平野の台地に恵まれています。主力であるサツマイモの作付面積は2.5千ha、収穫量は71.0千トンで、現在、日本一であります（95%がベニアズマ）。また、大消費地の京浜地区にも近いことから、春・秋メロンやトマト、イチゴ、水菜といった施設野菜の生産も大変盛んで、連日、出荷のための大型トラックが忙しく動いています。

昭和60年以前の旭村、銚田町などのサツマイモ経営は、関東ローム層の鹿島台地を利用してでん粉用と蒸切りイモ用のタムユタカや青果用の高系14号を中心に栽培していましたが、メロン、トマトなどを中心とする経営に比較すると収入は低く、農家経営的に低い評価を受けていました。しかし、農水省農業研究センター甘しょ育種研究室（在つくば市）が育成したサツマイモ新品種「ベニアズマ」が普及することにより、昭和60年以降の状況は大きく変化しました。時として“やませ”の影響でやや冷涼な夏日のある鹿島台地において、ベニアズマは高系14号に比べて色、食味、風味、形状ともよく仕上がり、また土質をさほど選ばずに作付けができ、収量も2割から3割増収することがわかりました。また、その時期の大田市場等の仲買から「消費者や小売業者から“甘くて美味しいベニアズ

マ”の声がある」、ベニアズマを出荷するようにとの要請がありました。ということで、栽培面積の拡大も可能になりました。農政のひずみ等で遊休農地の発生が多くなる当時の世相も、甘藷栽培の大規模化を後押ししてくれました。これらを背景に昭和60年に40才（会員退会年齢）以下の若者が集まり旭村甘しょ研究会（初代会長：井川茂樹）が発足。会員は40名程度、すべてが農業後継者でした。より良質のベニアズマを生産すべく活動は盛んで、当時には農研センター甘しょ育研の樽本勲室長や石川博美研究員にも後援を頂きました。しかし、ベニアズマが市場での主流を占めるようになった平成3年頃からは、産地として大問題が発生しました。生産畑における優良個体を種芋として選定して「種芋更新」するのが慣行でした。しかし、この種芋方式では形状、皮色、貯蔵性の優れた良品質のベニアズマが収穫できなくなってしまったのです。収入にも大きく影響し、農家を大いに悩ませ、重労働と相まって、甘藷栽培から施設野菜に切り替える農家もあったのです。幸いにこの大問題は、当時の鹿兒島県バイオ研究所（所長：樽本勲）などからの勧めもあり、ウィルスフリー苗を導入することにより改善され、現在に至っています。また現在では、個人の作付け方法や販売方法に合ったベニアズマのウィルスフリー苗を種苗会社から購入し、生産に利用しています（表1参照）。

＜現在の経営特性＞

平成20年の銚田市・旧旭村地区におけるベニアズマを主体とする農業経営は表1のようです。単作農家で15ha～20ha、また馬鈴薯、大根、ゴボウなどの野菜を組み合わせた複合経営農家で15ha～30ha程度の規模で作付けされています。特徴としては、①1農家あたりの借入れ地も含めた経営規模が大きいこと(平均20ha程度)、②主力は40～50才代で、その半数以上が農業経営士で、妻帯率がほぼ100%であること、また③50代経営者の全員が個人のキュアリング貯蔵庫（うち、70%で冷蔵貯蔵庫を併設）を保有し、独自の販路も確保しつつあること、および④多くに後継者が育ちつつあることなどが上げられますが、これは経営が安定し、所得も多いと後継者に理解された結果でしょうか。

＜新技術「もぐら植」＞

私たちの地域は、5月初めまで遅霜の心配があるため、5月初めから6月10日頃までが植え付け適期でした。しかしここ数年「もぐら植」という方法が急速に普及しています。特徴は、苗全体をマルチの中に挿

し入れてしまう植付方式です。このため霜や北東のいなさ風の被害がない、また芋苗の節がマルチ直下の軟らかい土壌中にあるためか、比較的上部に多くの塊根がつき、形状、収量もよいようです。また植付け幅が45cmから50cmと広いため苗数が少なく済むなどの利点もあります。これからの更なる普及が期待されています。

＜今後の課題＞

7月末から始まる早堀から、キャリング貯蔵物、冷蔵貯蔵物が終了する翌年の7月初めまでのほぼ周年で出荷が行われています。キャリング貯蔵では、近年の夏季天候が不順のためか、芋のなりづる側に傷みが入りやすく、商品価値を大きく下げってしまう場合が多く見られ、農家を悩ませています。早急に仲間たちと情報交換を行い解決しなければと考えています。また、消費者に美味しくて、安心安全なベニアズマをたくさん食べてもらい、更に安定した農業経営が出来るよう、地域をあげて栽培に取り組んでいきたいと考えています。研究機関、行政機関などのさらなる支援をお願いする次第です。

表1 銚田市・旧旭村地区におけるサツマイモ農家（事例）の経営内容など（2008年8月）

＜作付の型＞ 農家	作付け面積（借地割合） ／うち サツマイモ面積	労働人数（家族：研修生† ：季節雇用）／後継者	キュアリング貯蔵庫 （収容トン数）／冷蔵貯蔵庫
＜サツマイモ単作＞			
A	20ha（0%）／20ha	7人（3：2：2）／有	有（500t）／有
B	15ha（70%）／15ha	6人（4：0：2）／有	有（400t）／有
＜サツマイモ＋バレイショ＋大根＋ゴボウ＞			
C	30ha（80%）／12ha	7人（3：4：0）／有	有（300t）／有
＜サツマイモ＋バレイショ＋大根＋水稻＞			
D	20ha（60%）／12ha	7人（3：4：0）／有	有（280t）／有
＜サツマイモ＋バレイショ＋大根＞			
E*	20ha（85%）／8ha	6人（2：4：0）／有	有（300t）／有
F**	20ha（80%）／12ha	6人（2：4：0）／未定	有（240t）／無
G**	18ha（90%）／6ha	4人（2：2：0）／未定	有（160t）／無
H	18ha（75%）／14ha	10人（5：3：2）／有	有（240t）／有

*事例農家中Eは、ウィルスフリー苗利用率が50%。その他*印のない7農家はウィルスフリー苗利用率が100%

事例農家中FとGは、契約栽培をしていない。その他印のない6農家はすべて契約生産販売を行っている。

†主に外国人の農業研修生（年間雇用）